



2018・10・1

第 319 号

101-0065 東京都千代田区
西神田 2-5-7 神田中央ビル 303

TEL 03-3221-5075

FAX 03-3221-5076

安倍首相が「改憲案の臨時国会提出」を明言

安倍首相、改憲はまず公明と協議

安倍首相は、20 日の自民党総裁選勝利確定後の記者会見で、「党内では憲法論争がいろいろあった。事実上、一つの方向が出たと思っているとの認識を示したうえで、「党としては改正案の国会提出に向けて、幅広い合意が得られるように対応を加速していく。その際には友党の公明党との調整を行いたい」と述べました。

安倍首相は、今後の「最善のシナリオ」として、①秋の臨時国会で衆参の憲法審査会に条文案を提示する、②条文案をたたき台に議論を深め改憲原案をつくる、③来夏の参院選前に衆参で3分の2以上の賛成を得て改憲発議をする一を描いているといわれます(9月21日「読売」)。

そして当面の課題とされている公明党との話し合いに関し、山口代表は記者会見で、「憲法改正は政策課題の中で必ずしも優先順位が高いとは言えない」(19日)、「自民党の判断をよく注視しながら対応したい」と語っています。なお、公明党は自衛隊合憲の立場に立っていますが、これまで、下記

のように「改憲」方式を選挙公約に掲げています。

<公明党2016年参院選政策> 憲法改正に対し、公明党は「加憲」の立場をとっています。加憲とは、憲法3原則を守りながら、時代の進展に伴う新しい考え方・価値観を憲法に加えることです。

最も命軽んじる戦争反対

【熊本市／九条の会、地域革新懇】

「安倍9条改憲NO!」の3000万人署名に取り組む熊本市民らの宣伝行動が28日、「守ろう平和憲法」大看板前で行われました。九条の会と地域革新懇がよびかけたもの。

市民ら15人が、のぼり旗や横断幕、プラスターなどを持ち寄りアピール。交差点を信号待ちするドライバーが手を振ったりクラクションを鳴らして応援しました

参加した山本伸裕熊本県議は、アメリカのいいなりで軍事に予算をつぎ込む安倍政権を批判し、「社会保障の充実や想定外の自然災害から国民の生命、財産を守ることこそ優先して取り組むべき国の役割だ」と強

調しました。

参加した介護施設責任者の作取久さん(54)は、「もっとも命が軽んじられる『戦争する国』にしないために、運動で憲法を守りたい」と話しました。

意見広告などで署名達成へ

【高知県／憲法アクション等】 高知憲法アクションと「こうち総行動」は7日、高知市で3000万人署名の学習交流集会を開きました。

呼びかけ人の田口朝光氏が基調提案し、署名が世論を変えつつあり、安倍改憲ノーの声が増えていると紹介。▽現在6万3000に到達した署名を9月末に8万人、11月3日までに10万人を目標に集める▽高知新聞に意見広告を出す▽沖縄県知事選を支援する—ことを提起しました。

「目標1万人に対して到達は約2700人。ネジを巻き直して頑張る」(南国市民アクション)、「街頭行動などで2000人分集めた。楽しくやる工夫が必要だ」(一票で変える土佐の女たち)などの発言がありました。

高知大学の岡田健一郎准教授が「安倍9条改憲の現状と阻止の取り組み」と題して講演しました。

崩れている9条改憲の根拠

【福島県／9条の会】 福島県9条の会は9日、福島市で総がかり行動実行委員会共同代表の高田健氏(九条の会事務局)を講師に講演会を開きました。

伝承太鼓として350年余の歴史があり、東日本大震災後は「元気になる幸せの太鼓」とも呼ばれる「霊山(りょうぜん)太鼓」

保存会遠征組の演奏で幕開け。16人の勇壮な演奏に大きな拍手があがりました。

県九条の会の吉原泰助代表が「この講演会を安倍9条改憲の阻止へ立ち上がるきっかけに」と強調。同講演会県北実行委員会の相澤興一委員長があいさつしました。

高田氏は、内政でも北東アジアの平和の流れの進展などでも安倍9条改憲の根拠が崩れたと指摘。「戦後政治史上最悪、最低の安倍政権がなぜ倒れないのか」という質問にも答えながら、沖縄県知事選で勝利し、来年夏の参院選に向けて市民と野党の共闘を前進させることを強調。「決定的に大事なのは、3000万人署名を軸にした運動により、世論を大きくつくることだ」と署名運動の引き続き強化を訴えました。

「安倍さんは日本語通じない」のか

【青森県／県民の会】 「安倍9条改憲NO! 全国3000万人署名青森県民の会」は8月29日、「憲法9条は世界の窓」「改憲NO! 3000万人の声届けよう」のノボリやポスターを掲げ、青森市新町で街頭宣伝・署名行動に取り組みました。

「市民の力で憲法9条改悪を止めたいと署名をしています」—。参加した16人がそれぞれ声を響かせ、積極的に市民との対話に挑戦し、署名を広げました。

ある参加者は、ペンを取る市民には、秋の臨時国会に憲法改定案を提出したいと執念を燃やす安倍首相の話題を振り、信号待ちの高校生には「憲法9条を知っていますか」など、対話の内容を変え呼びかけます。

対話になった3人組の女子高校生は「戦争はいやだもんね」「そだね」と確認しあっ

て、そろって署名しました。

市民へビラを配布し署名を呼びかける人と、そこで足を止める市民に駆け寄り対話する人に分かれ、連携プレーで署名を広げる2人組もいました。

対話に応じ「改憲発議を止めたい」と署名した女性（50代）は、「安倍さんは、小さな傷をつくり勝手に傷口を大きくする人。安倍語を使い、日本語は通じない。早く辞めてほしい」と語りました。

「紛争は対話で解決ははかるべき」

【徳島／九条の会】 九条の会徳島は9日、徳島市でスタンディング宣伝し、「9条を守ろう」とアピールしました。16人が徳島駅前の元町交差点の4ヵ所に立ち、「Iラブ憲法」と書いたプラカードを掲げました。

安倍政権が集団的自衛権行使容認を閣議決定した直後の2014年9月から毎月実施、5年目になります。河村洋二事務局次長は「安倍9条改憲を許さない運動と世論は広がっている。改憲阻止まであきらめない」と語りました。

札幌市から来た会社員の男性（30）は「自衛隊を9条に書き込む、紛争は対話で外交的に解決を図るべきだ」と話しました。

署名行動は対話を重視して

【山形県鶴岡市／一学区九条の会】 一学区九条の会は15日、くらしのセンターコープ千石の入り口で「安倍9条改憲NO!」の署名行動に取り組みました。4人が参加し、55人が署名しました。

大高全洋同会事務局長は、「前川喜平氏（前文科事務次官）の講演会に1300人以上

が集まった、これからの日本と教育のあり方に関心をもつ多くの団体・個人が結集したからです」と訴えました。

30代女性は、「小中の子どもを育てているが、憲法9条を変えたら徴兵制がやってくる。そんな世の申にははいけません」と署名しました。

大高氏は「毎月15日の署名行動は対話を重視しながらすすめている。改憲勢力はこの機会を逃さずに国会発議にむけて準備していることから、気を緩めないで頑張りたい」と語っています。

被害拡大した大企業の無策批判

【北海道岩見沢市／岩見沢9条の会】 岩見沢9条の会（ト部喜雄代表）は18日朝、6人が参加し、岩見沢駅前で宣伝しました。

ト部代表がマイクを握り、6日発生した北海道地震で北海道電力がブラックアウト（全域停電）にした問題に言及。「停電で道民の日常生活が一変しました。朝食はランプで済ませたが、列車が不通で通学・通勤もできない。予定していた行事も中止」と語り、北電が苫東厚真火力発電所に多く依存しているため、1ヵ所に発電を集中すると直接関係ない地域でも被害が出たと批判しました。

訴えに、通学途上の女子高校生がじっと聞き入り、用意したビラ150枚が受け取られるなど、市民の関心が高まっていました。

「月報」配りながら署名をお願い

あつぎ・九条の会 後藤 幹生

3000万署名を集めるにあたって、まず思いついたのが、毎月届けている九条の会の

月報を手渡しで渡すということでした。おりしも雷雨の中、ズボンをビショビショに濡らして月報を手渡ししながら、署名をお願いすると、わりに気軽に署名してくれる方が多くいました。時期がちょうどお盆の前だったので、「明日子供たちもやってくるから、その分もください」といって署名の紙を1枚預かってくださる方もいらっしゃいました。

先日の会合でも話に出ていましたが、今後は地元で署名用紙をポスティングし、それを後日集めて回るという方法もありだと思いました。9月に入れば行動をしやすい気候になると思うので頑張ってポスティングをしようかなとも思っています。（「あつぎ・九条の会」No.143）

地域の戦争体験談を冊子に

9条の会所沢 伊勢田芳子

「9条の会所沢やまぐち」は、山口地区周辺を主たる活動地域とした会です。会が作られてから9年近く経ち、当初、会を立ち上げられた方々も高齢になりました。現在は顧問となられた先達に、戦争中の生活の話を開く機会があり、そうした話を記録として残しておきたいということから、この地域の方の戦争体験談を冊子にまとめることを今年の課題の1つとしました。

体験者が高齢になっているということもあり、今をはずしてはこの冊子は残せない、と使命のようなものを感じました。一部は聞き書きとなっています。聞き書きさせていただいた最高齢の浜林正夫先生はこ

の本が出来上がる前に亡くなられ、治安維持法にふれたお母さまの話を書かれた玉寄さんもこの本をご覧になった数日後に天国へ旅立たれました。この時がタイムリミットでした。

戦争体験といっても、年齢的には兵士として戦ったという方はなく、ほとんどの方は当時、学生・学童でした。

21名の執筆者はいずれも現在所沢在住の方だけなのですが、原稿をみると内容が様々で、一つとして重なりません。そして一人ひとりの当時の生活が映像をみるようによみがえってきます。映画等で当時の様子はおよそ分かっていたつもりでしたが、ここまで徹底して子どもに軍国教育がされていたとは思っていませんでした。

中学以上の学校に軍事教練という授業が入っていた、中国人に見立てた藁人形に銃剣を突き刺す訓練（今また中学体育で銃剣道が選択で入るとか！）、疑問の余地のない天皇崇拝（奉安殿というものを初めて知りました）、学業よりも優先された学徒動員、中学生も勤労働員。「風船爆弾」という兵器を女学生が作っていた等々。そして共通したのは「空腹」。食べるものがない！

戦争とは、自分の生活とは別のところで行われるのではなく、みんなの生活に関わる問題だということを子どもたちに伝えていかなければと、あらためて思いました。市の教育委員会に話を通し、市内の小中学校に1冊ずつ、行けるところには手渡しして、あるいは郵送で寄贈しています。先生方も戦争を知らない世代です。子どもたちに戦争を語る際に参考にさせていただきたいと思っています。

（「マスコミ・文化 九条の会 所沢」146号）